

若手研究者セッション 振り返りレポート

～「待望の第 2 回」島形式ネットワーキングの実施記録～

開催日	2026 年 5 月 22 日（金）15:10～17:10
会場	リーガロイヤルホテル大阪 第 13 会場【光琳】
主催・体制	日本糖尿病学会 将来計画委員会／若手セッション世話人 11 名
参加人数	約 80 名

1. 概要と企画の背景

本レポートは、第 69 回日本糖尿病学会年次学術集会において開催した第 2 回「若手研究者セッション」の企画から当日運営、参加者・世話人による振り返りまでを記録として整理したものである。

本企画は 2024 年度に将来計画委員会（第 3 次）で発案され、第 68 回年次学術集会（2025 年・会長：金藤 秀明 先生）で初開催された。若手同士のつながりを育み、互いに切磋琢磨する雰囲気を醸成することを狙いとし、各支部推薦の若手研究者 11 名が世話人を務め、第 69 回も同一メンバーが継続して担当した。

企画決定までの経緯：本企画は、2025 年 9 月から 2026 年 4 月まで計 4 回の企画会議・全体連絡会（いずれも Web 開催）を経て内容を検討した。

初回の課題であった「双方向性の強化」「対象若手層の明確化」「テーマの絞り込み」を踏まえ、第 69 回は前半の講演と後半のテーマ別 島形式スモールグループディスカッションを組み合わせた構成に刷新し、聴く（講演）→話す（島討議）→つながる（ネットワーキング）の流れを設計した。後半の島は、事前の会員アンケート（676 件）で把握した若手の関心をもとに「研究」「リアル留学（欧米編）」「臨床やる気スイッチ」「キャリア」の 4 テーマを設定した。進行方法について議論を重ね、事前アンケートの結果も踏まえて企画内容をブラッシュアップした。

- **世話人（11 名）：**野本 博司（代表）、川名 洋平、小田 知靖、霍田 裕明、川野 義長、鈴木 顕、三浦 絵美梨、馬殿 恵、村上 隆亮、三瀬 広記、岡川 章太（当日の役割は「3. 当日レポート」の各項に記載）

2. 集客・事前広報 — 「若手の声」 の可視化

「同じ悩みを持つ仲間を集める」ため、開催に先立ち 45 歳以下の会員を対象とした事前アンケートを実施し、当日の 4 テーマに沿って若手の関心と現状を把握した。結果はチラシ・抄録集・HP 等で「若手は、いま何に悩んでいるのか」として可視化し、参加動機づけと集客に活用した。

回答数	676 件（回答率 11.6%／集計期間 2026 年 3 月 24 日～5 月 6 日。）
対象	45 歳以下の会員

テーマ別に見えた主な傾向（自由記述より）：

テーマ	ひとことと言うと	代表的な声・論点
研究	「続けられない」 という課題	研究時間の確保が難しい／研究費・助成の制約／指導者・相談相手の不足／研究センターだと収入が不安
留学	行きたい < 現実が重い	円安・生活費など経済的不安／家族・ライフイベントとの両立／留学先の探し方・コネクション／帰国後ポストの不安
臨床	「どうしてる？」 を知りたい	行動変容支援の工夫／多職種・院内連携の進め方／診療負担とモチベーション維持
キャリア	人生のリソース配分に 悩む	働き方・家庭との両立／進路選択（臨床か研究か）／ロールモデル不足／専門医制度とのギャップ

< チラシの内容 >

希望の第2回～さらに実践的な内容に～

IMA JDS
第69回

若手研究者セッション

2026年5月22日(金) 15:10～17:10
リーガロイヤルホテル大阪 第13会場【光琳】

研究の島 リアル留学の島 臨床やる気スイッチの島 キャリアの島

聞く→話す→つながる。
ひとつなぎの次世代ネットワーク

1. 講演
「研究活動の場としての大学病院と市中病院」 45分
北海道大学病院 糖尿病・内分泌科 准教授・診療科長 中村 昭伸 先生
天理よろず相談 糖尿病センター長 林野 泰明 先生

2. テーマ別グループディスカッション（島形式） 45分
【事前登録制】当日の飛び入り参加も可
簡単な飲み物とお菓子をご用意しております

セッション詳細
参加登録はこちら

※若手セッション相談人メンバー
野本 健司・川島 淳平・小田 知雄・室田 知明・川野 直貴・鈴木 雄
田中 裕典・高橋 孝・村上 雅浩・三浦 広記・岡田 寛太



3. 当日レポート

3-1. 前半プログラム構成と講演の要旨（司会・進行：三瀬・三浦／企画趣旨説明：野本）

区分	時間（目安）	内容
前半	約 60 分	企画趣旨説明（野本） 講演 2 題「研究活動の場としての大学病院と市中病院」 （中村 昭伸 先生／北海道大学病院、林野 泰明 先生／天理よろづ相談所病院）
後半	約 60 分	テーマ別 島形式スモールグループディスカッション 簡単な飲み物・菓子を提供

前半は、対照的な二つの現場で研究を続けてきた二人による講演で構成された。

中村 昭伸 先生（北海道大学病院／大学病院の立場から）：研修医時代の「症例は考察まで含めて論文にしないで」との助言を出発点に、膵 β 細胞の基礎研究から多施設共同臨床研究までを歩んだ経験を率直に紹介。研究費や労務など大学ならではの苦労も包み隠さず示したうえで、恩師の言葉を引きながら「若手が楽しさと小さな成功体験を積める環境づくりが大切」と述べ、「研究で得た一番の財産は、ともに楽しむ仲間だ」と締めくくった。

林野 泰明 先生（天理よろづ相談所病院／市中病院の立場から）：市中病院に勤めながらハーバード公衆衛生大学院で臨床疫学を学び、単施設コホート「DDCRT」を築いた歩みを紹介。「ベッドサイドの疑問こそ研究の種」「手法さえあれば場所を選ばず研究はできる」「市中病院はデータの宝庫」と、市中病院だからこそ可能な研究の強みを具体的に示した。



3-3. 後半 島別スモールグループディスカッションの要旨（総合座長：川名・三浦）

研究の島（ファシリテーター：鈴木・霍田）

- キャリアパスや研究継続への不安が多く挙がる一方、経験豊富な世代から「楽しいことを続けていれば道は開ける」「途中で止まっても失敗ではない」と前向きな声。
- 研究時間・資金不足への対応として、治験・企業連携の活用、医師主導研究との並行、機械学習・アプリ開発など少資源で進められる研究などの具体例を共有。
- 中村先生より「同じ悩みを持つ仲間がいると感じられること自体が大きい」とのコメント。

リアル留学の島（欧米編）（ファシリテーター：岡川・三瀬）

- スイス・バーゼル留学中の世話人推薦者による動画視聴に続き、米国・欧州の留学経験者がリアルな経験談を共有。お金（円安・生活費）、留学先の探し方、タイミング、帰国後の意味が主なテーマ。
- 会場通信の不調でリアルタイム連携は限定的だったが、テーブル内の議論が活発化。林野先生より「困難はあるが、ぜひ挑戦してほしい」との励まし。

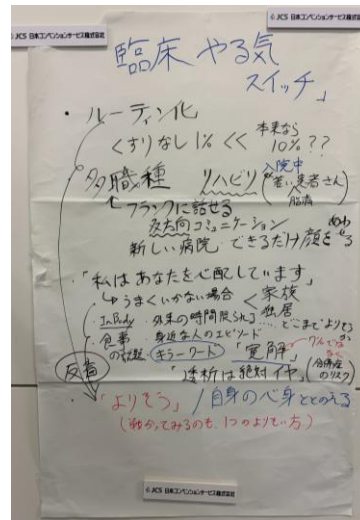
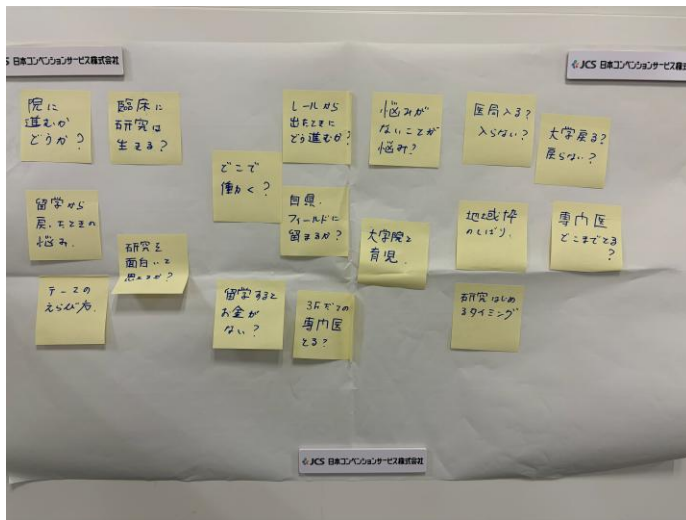
臨床やる気スイッチの島（ファシリテーター：川野・村上）

- 「患者が前向きに治療へ臨めるようどう支えるか」をテーマに、寄り添い方の多様性、合併症・透析等の説明の大切さ、InBody・万歩計など運動療法の工夫を共有。明日からの診療に活かせる実践例が多く集まった。

キャリアの島（ファシリテーター：小田・野本）

- 大学に残るか／市中病院か、専門医制度との向き合い方、選択のタイミングなど論点が広く、「一つの正解を探す」より「それぞれの現在地を持ち寄って考える」場となった。





全体まとめ：本スモールディスカッションは「答えを出す場」ではなく「悩みを共有しネットワークを作る場」として設定され、他施設の先生とつながれたこと自体に意義があったとの総括で閉会した。

4. 振り返り（参加者・世話人アンケート）

4-1. 参加者アンケート（回答 16 件）

- **満足度（ディスカッション内容）**：「期待以上」「期待通り」が回答の大半を占め、おおむね好意的な結果だった。
- **認知経路**：「他の人からの勧め（口コミ）」が最多、次いで「学会メール案内」。HP・抄録集・チラシ等が続く。口コミが集客に寄与した可能性が示唆される。
- **気づいた課題**：対象層の幅（参加者間の世代差）は引き続き検討余地がある。

4-2. 世話人アンケート（回答 11 名）

目的（若手の声を聞き、今後の支援のヒントを得る）への到達度：

大いにつながった	ある程度つながった	つながらなかった
4 名（36.4%）	7 名（63.6%）	0 名（0.0%）

「よかった点」（複数選択）の上位：

項目	選択数(%)
島形式が機能していた	10（90.9%）
若手同士の新たなつながりが生まれた	7（63.6%）
若手が話しやすい雰囲気だった	6（54.5%）
同世代のリアルな声が聞けた	6（54.5%）
前半講演とのつながりがよかった	3（27.3%）
継続できる価値を感じた	2（18.2%）

印象に残った若手の声（抜粋・匿名）：

- 外病院にいと研究を始める際のキャリアが心配。
- 海外で MPH を取得したが、修了後に教員のサポートが薄くなり研究が進まなくなった。
- 円安・物価高で留学資金のめどが立たない／留学先決定とグラント獲得の順序に悩む／ツテがなく留学先を探せない。
- 早期の大学院入学と専攻医システムの両立が難しい／他大学院への進学が歓迎されるか不安。
- 家族と 21 時に就寝し 3 時に起床して家事と自分の仕事を両立している、という働き方の声も。

今後優先して取り組む価値が高いと思うもの（3つまで）の上位：

- 若手同士の交流機会（10）／研究支援（6）／留学支援の充実（5）／年次集会での若手セッション継続開催（4）／地方・施設間ネットワーク（4）

当日に生まれた「横のつながり」の例（自由記述より）：

- 同じ島になった参加者同士が、後日の YIA 表彰式で再会し、研究の悩みを語り合った。
- 世話人が声がけしていない「飛び込み」参加者（大学に所属しない意欲的なメンバー）も自発的に加わった。
- ある島では参加者が自ら発表役を引き受け、受け身ではない当事者としての議論が生まれた。
- 留学の島では、セッション後に個別の将来相談に訪れる参加者もいた。

5. まとめ

第 69 回若手研究者セッションは、初回の課題であった双方向性を島形式スモールグループディスカッションで改善し、事前アンケートに基づく設計によって、若手同士の交流創出という目的に確かな成果を上げた。今後は、時間設計や運営インフラを磨きつつ、セッションを起点とした継続的なネットワークと支援の仕組みへ発展させていくことが期待される。本企画は、学会の持続的発展と多様なキャリア形成支援に資する取り組みとして、継続的な展開が望まれる。



以上